

<随想>開かれた言葉を

西田, 勝 / ニシダ, マサル / NISHIDA, Masaru

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

45

(開始ページ / Start Page)

78

(終了ページ / End Page)

80

(発行年 / Year)

1992-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019644>

開かれた言葉を

ことし（一九九一年）は、ボーダーレスになりつつある現代社会の趨勢を反映してか、私が代表をしている日本社会文学会では、何と三回も国際シンポジウムを開いた。一つは五月末、新潟市で開いた日ソ文学シンポジウムで、テーマは《シベリア——出兵と抑留》だった。これは一九八九年秋、長崎市で開いた国際シンポジウム《核と文学——アジアから見たナガサキ》で提起された、被害と加害の問題を日ソの間で深めるものだった。私達はソ連というと、戦後の国民感情として「ソ連に裏切られた」あるいは「ひどい目にあつた」となりがちだが、反面、ソ連が誕生する時、日本はシベリア地方に何個師団の軍隊を送り、多くのソ連人の財産を破壊し、生命を奪っているのだ。

二つは一月中旬、沖縄は那覇市で開いたもので、テーマは《古領と文学》。これは、それまでのシンポジウムの、いわば総合編ともいべきもので、アジア・太平洋の規模で、この被

西田 勝

害と加害の問題を眺めてみようというものだった。当初は米国・ソ連・モンゴル・北朝鮮・韓国・中国・台湾・フィリピン・グアム・インドネシア・ベトナム・タイ・シンガポール・マレーシアから作家や学者を招いて行なうつもりだったが、それぞれの事情があつて、残念ながらモンゴル・北朝鮮・ベトナム・マレーシアからは代表を迎えることができなかった。しかし、新聞などにも紹介されたように、パネリストたちの発言は率直であると同時に内容豊富で、予想以上の出来栄となった。「話しっぱなし」にしてしまうのは惜しいので、現在、その記録を編集 중이다。

三つは、つい最近、名古屋と東京で開いた《トルストイと現代》。これは八九年以来、ソ連科学アカデミー文学・言語学部との間で相互に行なわれている日ソ文学シンポジウムの第三回目で、五月の日ソ文学シンポジウムとは性格が違う。こちらの方は、ハバロフスク地方の歴史学者との間に別個に企てられた

ものだ。前者のほうは第一回目が法政で行なわれた《現代文学における価値観の変遷》、第二回目がモスクワで昨年（一九九〇年）行なわれた《大衆文学の評価》で、こんどは日本で、トルストイの今日的な意味を相互に考えてみる、ということになったわけだ。

これらのシンポジウムを準備、あるいは参加して強く反省させられたことの一つは、私達が一方では自分たちを、この「地球号」の乗組員だと言ったり書いたりしていながら、日本人にしか通用しない、閉じられた言葉、敢えていえば隠語としかいえないような言葉を、ほとんど無意識に使っているということだった。

例えば年号の表現。使い慣れているところから、つい「明治何年」「昭和何年」あるいは「明治文学」「大正文学」などと発言してしまうのだが、これらの言葉は、もちろん、相手が或る程度、日本を知っていない限り、そのままでは通じない。だから、その場合、翻訳が西暦に直したり、あるいは簡単な説明をして伝えるのだが、そこに一つの《壁》——《菊の壁》があることは否めない。

どうして日本人は、日本人にしか通用しない元号、本家の中国ももう使っていない元号というものに固執しているのか。世界はとにかく、このアジアで本国にしか通用しない記年法あるいは表年法に固執しているのは日本だけで、中国も北朝鮮も韓国もフィリピンも記年あるいは表年は西暦だ。

私自身は、西暦至上主義者ではない。諸国民が協議して「人

類暦」を創るのがベストだと考えているが、政府が世論を無視して「元号法」を強行に制定して以来、それに抗議して元号を書くことをやめ、西暦のみを使っている。しかし興味深いことに、ほかならぬその政府が「元号法」を厳密には守っていないことだ。例えば、外務省の発行するパスポートには、どこにも元号表記はない。生年も西暦で書かれている。日本を一步出れば、元号では通用しないからだ。

それだけではなく、かつてアジア・太平洋地域に属する国々の人々に元号を強制した歴史が日本にはある。だから彼等に対して元号を使うことは論理的にいつても、非常に心のない、傲慢なことをすることになる。そのことを知らない若い人々は双方とも気にもとめていないが、それを知っている私などは、留学生たちが大学の書類などに元号を書かされているのを見ると、心が痛む。数年来、大学当局に、しばしば公的書類から元号をなくすよう求めているが、今のところ何の気配もない。トルストイ・シンポジウムで名古屋に行った時に聞いたことだが、名古屋大学では、来年度から全学部で、その公的文书を元号表記から西暦表記に変えるそうだ。わが法政大学も一日も早く、そうなってほしいものだ。

「明治」とか「大正」とか、あるいは「大正文学」とか「昭和文学」とか、元号を使わない文学研究、文学史の叙述が時代によって求められていることを、ひとしお感じた一年だった。

もう一つ例を挙げると、「太平洋戦争」という言葉。戦後、アメリカから入ってきて日本人の表現空間にも定着してしまっ

た言葉だが、たしかにアメリカ人から見れば、一九四一年から始まった戦争は「太平洋戦争」に違いないが、一月八日は、ただ日本軍による真珠湾奇襲があった日ではない。その日は同時に、日本軍がマレー半島に奇襲上陸した日でもある。しかも後者のほうが前者よりも一時間ほど早い。「太平洋戦争」という言葉では、マレー半島への奇襲上陸からはじまった、日本による東南アジアへの侵略、占領という事実がズリ落ちてしまう。一九四一年から始まった戦争は正しくは「東南アジア・太平洋戦争」といべきだろう。

「一五年戦争」という言い方がある。これは「満州事変」以降の戦争を一連なりの戦争と見て、時間によって、それを表現した言葉だが、最近、それを空間によって見て、誰いうとなく「アジア・太平洋戦争」という言葉が使われるようになってきた。適切な表現だと思う。

(にしだ まさる・文学部教授)